

〈論文〉

学習者が大学で「英語」を学習する目的意識の調査報告

ペニントン 和雅子

要旨

本稿は、学習者が大学で英語を学習する目的意識を分類し、量的に調査した結果の報告である。本研究では、英語学習の目的を言語、教養、功利、理想の4つの目的に分類し、316人の大学生を対象に目的意識に関する23項目の質問票調査を実施した。その結果、功利目的が最も高く、続いて教養目的、言語目的、理想目的の順となった。しかし各目的の内容を精査すると、学習者の目的意識は多様で複雑であることが分かった。功利目的は、単位取得や就職など現実的な利益に関わる項目の平均値が高く、また自己受益目的の方が公共の利益目的よりも高い傾向にあることが分かった。一方、教養目的も全体として高い平均値を示し、教養の涵養を目的とする英語学習は、学習の喜びにつながる傾向が見られた。言語目的、理想目的は、項目の平均値が比較的低かったものの、全体としては肯定的な傾向にあり、学習者の英語学習目的の多様性が確認された。また、学習者の英語学習目的は固定的なものではなく、学習や体験によって変化していくことも明らかとなった。

はじめに

英語教育学とは、「英語教育の目的・目標・方法を研究する学問分野」である（森住, 2010, p.4）。英語教育の「目的」とは、なぜ英語教育を行うか、つまり教育理念や教育哲学、価値観などに関する部分であり、「目標」とは、何を教えるべきかについて、すなわち言語材料や言語活動に関する部分である。そして「方法」とは、目標達成のためにどのような教授法や指導法を用いるべきかについてである。英語教育研究に関して言うと、英語教育の「目標」（例えば文法や読解技能の習得など）や「方法」（例えば、訳読法やコミュニカティブ・アプローチなど）については、すでに多くの成果がある（Ellis, 1997, 2008; Brown, 2007; Richards & Rodgers, 2001; Richards & Renandya, 2002; 田崎, 1995; 村野井, 2006を参照）。しかし、教育の「目的」についての詳細な研究は近年あまりなされていない。社会生活では英語をほとんど使用しない環境（English as a Foreign Language, EFL）にありながら、日本の大学ではなぜ英語専攻の学生以外にも英語教育が行われているのかについての議論が少ないのが現状である。水島（2010, p.81）は、「多くの大学英語教員は目的論にあまり関心が無いように見える」とも述べている。しかし、どのような目的で英語を教えるかによって、本来は目標や教授法が変わるはずである。

例えば、「国際政治やビジネスに対応できる人材を育成する」という目的であれば、「高学歴の英語母語話者と同等のリーディング、リスニング、スピーキング、ライティング能力を習得すること」が目標の候補として上がり得る。それに基づき、「4技能の中でもスピーキング能力については、少人数教室でコミュニカティブ・アプローチに基づいたタスク・ベー

スの教授法を採用する」というように教授法を決定するかもしれない。一方で、「学生の将来的な選択肢を増やす」ということが目的であれば、「4技能の基礎的運用能力を習得する」ということが目標となり、「スピーキング能力については、PPP（Present, Practice, Produce—言語材料の提示，練習，産出）を中心として，応用のためのアクティビティを付随的に取り入れる」という教授法を取るということにつながるかもしれない。つまり，教育目標と教授法は，教育目的実現のための手段であり，カリキュラム作成の際には教育目的を明確にすることが必要である。

本稿は，日本の大学英語教育に携わる教員の教育目的意識について体系的な研究をするにあたり，まず英語学習者の学習目的について調査した結果を報告する。本稿で，「英語」とは，主に1，2，3年生を対象とする外国語科目としての英語教育，つまり，教養課程における一般英語を指す。

1. 英語教育の「目的」

まず，英語教育の目的について，これまでどのような議論がなされてきたかを概観する。

1.1 日本国内での議論

従来，英語教育の目的は，「教養」か「実用」か，という枠組みで考えられてきた（佐藤，2002，p.49）。教養的な目的としては，主に言語や文化に対する視点の育成や複眼的思考の育成，自分の座標軸の再確認などがあげられる。一方，実用的な目的としては，受信や発信のコミュニケーション，自分の生活の物理的な向上，職業や学問研究の達成などがあげられる（森住，2010，p.4）。

しかし，田田野（2004）も述べる通り，「英語教育においては，教養か実用かの完全な二分化は不可能であり，（中略）二者択一の議論はあまり意味がない」。また，両者は相互に補完する関係にある（森住，2010，p.4）とも言える。純粋に教養目的だけ，もしくは実用目的だけの教育というのは現実的に考えにくいし，二者択一の議論は，「そもそもなぜ日本人学習者に英語運用能力が必要と考えるか」という根本的な疑問に答えるものではない。

英語教育の「目的」について体系的に調べた研究は日本では少ないが，大学英語教育学会実態調査委員会（2003）の『わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究—大学の外国語・英語教員個人編』（以下，教員の実態調査研究と呼ぶ）が，英語担当者の外国語教育の主な目的について質問調査を行っている。その結果は表1の通りである¹。

この調査によると，「外国語を使って諸外国の文化・事情を理解する」を選んだ教員が半数以上いたことが分かり，教養中心の目的観が見てとれる（水島，2010，p.79）。また，教員の実態調査研究に付随的に記載されている1983年の同様の報告書では，「一般英語の第一目的は主として何か」という質問に対して，複数回答可で回答を集計した結果，上位4項目は，「教養を高めること」52.0%，「英語によるコミュニケーション」47.0%，「専門教育の基礎力養成」36.2%，「国際人の養成」17.9%であったということであり，やはり教養の涵養を選んだ教員の割合が高い。

この教員の実態調査研究結果は，英語担当教員が持っている英語教育の目的について大ま

かな傾向を示している。しかし、英語教育の目的意識を具体的に明らかにしたとはいえない。特に、水島（2010， pp.81-82）は、次のような提言をしている。すなわち、本調査では「教養」とは何かが定義されておらず、回答者が考えていた「教養」の中身が明らかではないことから、今後の実態調査では、「教養」目的の選択肢として、(1)メタ言語能力の育成、(2)複眼思考の涵養、(3)自分の座標軸の再確認などを含めるべきとしている。また、「教養」目的の他に、英語教育の究極的な目的である「人格陶冶・世界平和」を選択肢として入れるべきとも述べている。

表 1. 英語担当教師が大学で外国語を教える目的（2 つまで選択可）(N=787)

項 目	回答率
1 外国語を使って諸外国の文化・事情を理解する	51.7%
2 外国語を使って国際的に活躍できる能力を育成する	36.6%
3 外国語学習を通して教養を高める	35.5%
4 外国語を使って日常生活ができる	24.0%
5 外国語を使って日本のことを外国に伝えることができる	13.1%
6 その他	4.6%

1.2 教育全般の目的

英語教育は、他教科も含む教育全体の一部であり、教育全般の目的と合致しているべきである（小池，1993，p23; Crooks, 2003）ことから、次に教育全般の目的を考慮する。

教育基本法第一条（平成18年改訂）の「目的」によると、「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない。」とある。これは、水島（2010）が究極的目的と呼ぶものである。

そして、このような教育目的を実現するための教育目標として、第二条では、次のような項目を挙げている。すなわち、教養の涵養、真理探求の態度、情操・道徳心の醸成、健やかな身体育成（第一項）、個人の価値の尊重、創造性、自主性、自律の精神、勤労を重んじる態度の養成（第二項）、正義と責任、男女平等、公共の精神、社会形成への主体的な参画（第三項）、生命や自然を大切にす、環境保全（第四項）、伝統と文化の尊重、郷土愛（第五項）、他国を尊重し、国際平和と発展へ寄与する（第六項）などである²。これらは、「目標」となっているが、英語教育を考える場合には、教育目標というよりは、教育目的に近い。

それは、文部科学省が平成14年に発表した「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」にも表れている。つまり、この構想の趣旨は、「経済・社会等のグローバル化が進展する中、子ども達が21世紀を生き抜くためには、国際的共通語となっている『英語』のコミュニケーション能力を身に付けることが必要であり、このことは、子ども達の将来のためにも、我が国の一層の発展のためにも非常に重要な課題」という点にある。つまり、英語教

育の「目標」は、英語によるコミュニケーション能力の習得であり、その「目的」は「子ども達が21世紀を生き抜くため」、「子ども達の将来のため」および「我が国の一層の発展のため」である。ここでは、子どもの利益と国家の利益を考慮した英語教育の目的が示されている。

1.3 英語教育の目的の類型化

以上の議論を総合すると、英語教育の目的は、大きく「教養」と「実用」に分類されるが、特に「教養」目的は明示的に表されないことが多いため、具体的に内容を定義する必要がある。本研究では、水島（2010）で提案された調査内容も含めて、次のように4つに分類する。

まず、「教養」は、「言語目的」と「狭義の教養目的」に分けて考える。「言語目的」とは、言語としての英語の教育や英語の習得そのものが目的である場合である。例えば、英語の音声の美しさを知ることや言語としての英語の構造を理解すること、英語運用能力を習得すること、またはメタ言語の知識などである。通常は、言語学や英語学、英米文学専攻の学生を対象とした教育の目的となるものであるが、一般英語教育でもこの目的は存在する。一方で、「狭義の教養目的」とは、異文化理解や批判的思考力や複眼的視点を養うなど、英語教育を通して「言語目的」以外の教養的な目的を達成しようとする場合である（以下、「教養目的」という場合は、「狭義の教養目的」を指す）。

次に、「功利目的」という目的を設ける。これは、学習者自身の生活の物理的な向上や、職業や学問研究の達成、もしくは国際国家としての発展などで、従来、「実用」と呼ばれている目的である。本稿で「実用」ではなく「功利」という言葉を使用するのは、「実用」が「英語を分かって使える能力」や「コミュニケーション能力の習得」という概念と結びついていることが多いためである（片山, 1973 cited in 水島, 2010, p.77; 森住, 1991; 佐藤, 2002）。本稿では、そもそもなぜ英語学習者は、英語によるコミュニケーション能力が必要であると考えるのかを探るのが目的である。そこで英語学習の目的を地位、職業、経済、生活などの向上や充実に求める考え方を「功利目的」とした。この点、理由は不明であるが、前述の教員の実態調査研究でも、1983年の調査では「英語によるコミュニケーション」が教育目的の項目にあったが、2003年の調査では、この項目は除外されている。

さらに、教育基本法第一条や水島（2010, p.82）が述べている教育の究極的な目的である人格育成や世界平和の追求などを「理想目的」とする。

本研究では、これらの英語教育の目的を学習者の視点から調査する。研究課題は、学習者はどのような目的意識をもって大学の「英語」の授業を受講しているかである。従って、「英語教育の目的」は、「英語学習の目的」となる。大学生の「英語学習の目的」として予想される内容を表2に表す。

表 2. 学生が大学で英語教育を受ける目的として予想される内容

目的	例
言語	英語の音声の美しさを知る, 英語の楽しさを体験する, 英語学習の過程を知る, 英語の言語的な特徴を知る, メタ言語の知識
教養	教養の涵養, 批判的思考力や複眼的視点を養う, 異文化の理解, 日本の文化や政治経済を再認識する
功利	国際国家としての発展, 世界に通用する商人となる, 資格取得, 就職, 入学試験合格, 生活の物理的な向上, 職業や学問研究の達成
理想	人格育成, 真理の探求, 自己の開示, 内省, 幸福追求

2. 研究の方法と材料

調査参加者は、西南学院大学で英語の授業を受講している1年生から4年生316名（男138名、女178名）である³。2011年12月に、Moodleのアンケート機能を利用して、授業外で質問票調査を実施した。質問票は無記名で、成績評価には影響しないことを明記し、4段階のリカー尺度（Likert scale）による英語の学習の目的に関する質問23項目及び、自由記述式質問1項目を用いた。英語の学習目的に関する質問項目には、大学英語教育学会実態調査委員会（2003）で使用された5項目（表1）を学習者向けに文言を修正して入れ、また1.3で述べた多様な目的を含むようにした。尺度は、4=非常にそう思う、3=そう思う、2=そう思わない、1=全くそう思わない、とした。偶数個の尺度を用いたのは、調査参加者が安易に中立的な選択肢を選択するのを回避するためである（Brown, 2001, p.41; Dörnyei, 2003, p.37）。さらに属性調査として、学部学科、学年、性別、および英語の嗜好（3=好き、2=普通、1=嫌い）と大学での英語の授業の必要性の意識（4=非常に必要、3=必要、2=不要、1=全く不要）に関する質問項目5項目を用いた。本稿では、目的に関する質問票調査及び属性調査の結果部分のみを扱う。使用した質問票は参考資料に掲載する。

3. 結果

3.1 質問票調査の結果

質問調査票の項目間の内的信頼度は、Cronbach α = 0.90であった。英語の学習目的ごとの記述統計を表3に示す。また、質問項目ごとの記述統計を平均値が高い順番に表4に、学習者が大学で英語を学習する目的の項目ごとの度数分布を表5に示す。

まず、目的の種類別に見ると、功利目的の平均値が最も高く（3.13）、続いて、教養目的（3.03）、言語目的（3.00）、理想目的（2.57）の順であった（表3）。

次に、表4で明らかかなように、質問票23項目中、22項目の平均値がリカー尺度4件法の中

間値である2.50以上であった。平均値を比べると、「単位を取得して大学を卒業する(3.46)」が最も高い。この項目は、「非常にそう思う」もしくは「そう思う」という肯定的な回答をしている参加者が96%であった(表5)。次に平均値が高かったのは、「人生の選択肢を増やす(3.38)」で、肯定的な回答をした参加者は93%であった。続いて順番に、「就職に役立てる(3.36)」では89%が肯定的回答、「人脈や交友関係を広げる(3.30)」では88%が肯定的回答、「英語の資格を取得する(TOEIC, 英検など)(3.29)」では88%が肯定的回答をした。このように、上位5項目は功利目的であった。

功利目的でも「英語を使って国際的に活躍できる能力を身につける(3.23)」(8位で85%が肯定的回答)、「英語を使って国内外の情報を収集する(3.08)」(11位で82%が肯定的回答)、「海外で仕事や生活ができるようになる(3.06)」(12位で74%が肯定的回答)、「英語を使って日常生活ができるようになる(2.95)」(16位で73%が肯定的回答)、「英語を使って日本のことを外国に伝える(2.85)」(18位で70%が肯定的回答)など、国際ビジネスや海外生活と結びつく目的は上位5位の項目と比べると平均値が低い結果となった。また、「英語を使って国際国家としての日本に貢献する(2.50)」(22位)を見ると、国家繁栄のために自分が英語を学習するという意識は高くなく、53%の参加者が否定的な回答をした。

教養目的として最も平均値が高かったのは、6位の「英語学習を通して、教養を高める(3.28)」であり、93%が肯定的回答をしている。続いて、9位の「英語を通して多角的な視点を身につける(3.14)」(83%が肯定的回答)及び10位の「英語を使って諸外国の文化・事情を理解する(3.09)」(84%が肯定的回答)である。これらは、比較的高い平均値を示しており、また、全ての項目で80%以上の調査参加者が、教養目的を持っていることがわかる。

言語目的は、「英語でコミュニケーションをすることの楽しさを体験する(3.27)」が7位で最も高く、90%の調査参加者がこの項目に肯定的な回答をした。「英語の美しさや面白さを理解する(2.99)」は14位で79%が肯定的回答をし、「英語の学習過程そのものが有意義である(2.92)」は17位で74%が肯定的回答をした。続いて「英語という言葉の特徴を理解する(2.80)」は19位で、69%が肯定的回答をした。つまり、英語によるコミュニケーションを楽しむという目的意識は比較的高いが、英語という言葉自体への理解を目的とする傾向は他の項目と比べて高いとは言えない。それでも、全体的には70%以上の調査参加者が、すべての言語目的の項目について肯定的な意向を持っていることが分かる。

理想目的は、「英語学習を通して国際的なアイデンティティを形成する(2.97)」(15位で78%が肯定的回答)、「英語学習を通して人格を形成する(2.52)」(21位で47%が肯定的回答、53%が否定的回答)、そして、全体の最下位が「英語を使って真理の探究をする(2.21)」である。この項目は、否定的回答が70%と最も高く、13%の調査参加者は「全くそう思わない」を選んでいる。

表 3. 英語の学習目的ごとの記述統計量 (N=316)

項 目	平均	標準偏差
1 功利目的 (11項目)	3.13	0.76
2 教養目的 (5項目)	3.03	0.70
3 言語目的 (4項目)	3.00	0.72
4 理想目的 (3項目)	2.57	0.76

表 4. 質問項目ごとの記述統計量 (N=316)

項 目	平均値	標準偏差	種類
1 単位を取得して大学を卒業する	3.46	0.61	功利
2 人生の選択肢を増やす	3.38	0.62	功利
3 就職に役立てる	3.36	0.70	功利
4 人脈や交友関係を広げる	3.30	0.69	功利
5 英語の資格を取得する (TOEIC, 英検など)	3.29	0.71	功利
6 英語学習を通して, 教養を高める	3.28	0.60	教養
7 英語でコミュニケーションをすることの楽しさを体験する	3.27	0.63	言語
8 英語を使って国際的に活躍できる能力を身につける	3.23	0.71	功利
9 英語学習を通して多角的な視点を身につける	3.14	0.70	教養
10 英語を使って諸外国の文化・事情を理解する	3.09	0.65	教養
11 英語を使って国内外の情報を収集する	3.08	0.67	功利
12 海外で仕事や生活ができるようになる	3.06	0.86	功利
13 日本の文化や考え方を再認識する	3.03	0.69	教養
14 英語の美しさや面白さを理解する	2.99	0.69	言語
15 英語学習を通して国際的なアイデンティティを形成する	2.97	0.67	理想
16 英語を使って日常生活ができるようになる	2.95	0.75	功利
17 英語の学習過程そのものが有意義である	2.92	0.75	言語
18 英語を使って日本のことを外国に伝える	2.85	0.71	功利
19 英語という言語の特徴を理解する	2.80	0.72	言語
20 英語学習を通して, 論理的な思考力を身につける	2.63	0.67	教養
21 英語学習を通して人格を形成する	2.52	0.71	理想
22 英語を使って国際国家としての日本に貢献する	2.50	0.79	功利
23 英語を使って真理の探求をする	2.21	0.70	理想

表 5. 大学での英語学習の目的の度数分布 (N=316)

	非常にそう 思う (%)	そう思う (%)	そう思わない (%)	全くそう 思わない (%)
言語目的				
英語でコミュニケーションをすることの楽しさを体験する	37	53	10	0
英語の美しさや面白さを理解する	22	56	20	1
英語の学習過程そのものが有意義である	22	52	23	3
英語という言語の特徴を理解する	15	54	28	3
教養目的				
英語学習を通して、教養を高める	26	57	8	0
英語学習を通して多角的な視点を身につける	32	51	16	1
英語を使って諸外国の文化・事情を理解する	25	59	15	1
日本の文化や考え方を再認識する	25	55	20	1
英語学習を通して、論理的な思考力を身につける	9	47	43	2
功利目的				
単位を取得して大学を卒業する	51	45	3	1
人生の選択肢を増やす	45	48	6	0
就職に役立てる	49	40	11	1
人脈や交友関係を広げる	43	45	11	1
英語の資格を取得する (TOEIC, 英検など)	42	46	10	2
英語を使って国際的に活躍できる能力を身につける	39	46	15	0
英語を使って国内外の情報を収集する	27	55	18	0
海外で仕事や生活ができるようになる	36	38	22	4
英語を使って日常生活ができるようになる	23	50	24	2
英語を使って日本のことを外国に伝える	17	53	28	2
英語を使って国際国家としての日本に貢献する	11	36	45	8
理想目的				
英語学習を通して国際的なアイデンティティを形成する	21	57	22	1
英語学習を通して人格を形成する	9	38	49	4
英語を使って真理の探求をする	4	26	58	13

3.2 自由記述の結果

自由記述回答の中には、質問調査票の項目に書かれた内容をほぼそのまま繰り返した回答も多かった。例えば「学科卒業の単位であるため」、「日常会話ができるようになりたい」、「外国人とコミュニケーションをしたい」、「就職に役立つから」、「TOEICで高得点を取りたい」などである。ここでは、学生が考える目的が具体的に明示された回答を抽出して列挙する。なお、調査参加者が使用した文言通りに記載する。

言語目的がみられる回答

- a. 大学で英語を学ぶ一番の目的は、単位を取得し、卒業するためではあるけれど、英語を学んでいるうちにイギリスの習慣や英語のことわざなど知識が増えていくのが英語を学んでいて最も楽しいと感じる瞬間です。（後略）

教養目的が見られる回答（特に言語理解、異文化理解）

- b. 「TOEICで高得点を取得し、就職に役立てたい」というのが以前の目的だったが、大学で、高校の受験英語とは違う、コミュニケーションに主体を置いた講義を受けて、その中で覚えた会話表現や言い回し、日本語との表現方法の違い、スラング等から日本の文化・習慣を再認識できたら良いと考えている。
- c. 日本語のみを学ぶことだけでは理解できない言葉のつくりや文法、その中から考えられる英語を使う人の国民性やその国の歴史・文化的背景について理解を深める。
- d. 大学で英語を学ぶ一番の目的は単位を取得し、卒業するためではあるけれど、英語を学んでいるうちにアメリカやイギリスの習慣や英語のことわざなど知識が増えていくのが、英語を学んでいて最も楽しいと感じる瞬間です。英語は苦手ですが、やっつけて損はないと感じています。
- e. 英語圏の国々との違いを通じて日本の特徴、またこれからの在り方を考える上で必要だと思う。
- f. 日本人間でコミュニケーションをとるのも面白いが違う国、違う気候、環境で育った人たちにもとても興味がある。就活に役立てられるかもしれないという可能性もあるけれど、それ以前にコミュニケーションの方法として英語を習得したいと思っています。

教養目的が見られる回答（特に視野を広げる、思考力育成）

- g. 英語を通して様々な国の人々と手を組みグローバルな視点から今後の人生を有意義なものにしたいと考えるから。
- h. 世界における日本への視点を探求する。
- i. 英語を学ぶことで自分の考えにとらわれないようにしたい。
- j. メディアリテラシーを行えるようになるための手段の一つ。国内メディアだけに信用を置くことは危険と考える。

功利目的が見られる回答

- k. もちろん人それぞれだが勉強していて損をすることはないし活躍や可能性の幅が広がる。
- l. 英語は世界共通語であるため、ボーダーレスが加速している現代においては英語を勉強

しておく義務があると思います。英語を大学で学ぶ理由はその義務を果たすためです。

m. (前略) 英語を学ぶことで会社などに役立つことが一番の目的です。

理想目的が見られる回答

n. 世界に通用する人間形成のため。

o. 英語が話せれば楽しいし、自分の個性にも繋がってくると思う。

質問項目では直接問わなかったが、自由記述での回答に見られたものに、英語で自己表現をしたいという意見や、大学の英語の授業自体に意義があるという意見があった。その例をここに示す。

自己表現が目的

p. 最近、街中で多くの外国人を見かけ、そして話しかけられることもあります。話しかけられた時の話ですが、自分の下手な英語でも理解しコミュニケーションをとれたとき、英語を学ぶ意味というものを理解できました。

q. (前略) 韓国の友達と簡単な英語でメールをしているんですけど、英語の力が無いのですごく大変に感じることがあります。だから、自分の想いを相手に伝えられるように学習していきたいです。

r. 英語は世界で共通の言語なので、英語さえ理解することができれば誰とでもコミュニケーションをとることができるので、色々な人の価値観を知ることができる。さらに、英語を学習することによって英語に限らず日本語の語彙が増えたり、日本語では表現のできない気持ちなどを英語では表現できる。

s. 卒業のため、単位のためというのが大きいですが、もし英語の選択が自由で取らなくてもいいとなっても簡単な英会話などであれば取りたいと考えると思う。(後略)

英語の授業の受講が目的

t. 英語の授業を通して、なるほどなと思うことがたくさんあって面白い。(後略)

u. 中学校や高校のように入試のために文法や単語を頭に叩き込むのではなくてそのようなプレッシャーはない大学の英語は英語を楽しむことに意味があると思う。(後略)

v. 学部にもよるものだと思いますが、私の知人は英語をまったく勉強する機会がなくなってしまった人がほとんどです。週に二、三回の英語の授業だけでは海外に通用する英語を学ぶのは難しいですが、継続して英語を学ぶ環境にいることが大事なのだと思います。

w. 私は2年間大学で英語を学び、英語を身近に感じながら学べるのが大学の英語学習の特徴かなと考えます。だから日常生活に役立てることのでき、今後プラスできることが目的なのかなと思います。

x. 自主的に英語を学ぼうとするきっかけになる。

4. 考察

4.1 学習者の目的意識の多様性

近年の大学英語教育は、実用目的に傾斜してきている（水島, 2010, p.81）。しかし、本調査の結果から分かるのは、調査参加者は多様な目的をもって大学の英語の授業を受講しているということである。

確かに、上位5位が「功利目的」であるのは大きな特徴と言えよう。これは、目的ごとの平均値の結果（表3）からも見て取れる。しかし、功利目的の内容を精査すると、次の二つの特徴が見られた。第一に、目の前の現実的な利益（例えば、単位取得や就職、交友関係の充実、資格取得など）の方が、国際ビジネスや海外生活に関する目的よりも強い傾向にあることだ。学習者は、世界規模の市場で生きていくという目的よりは、把握しやすい現実的な目的の方を強く持っていると言えよう。ただし、自由回答では、グローバル社会において、世界共通語である英語を習得しておくのは重要だという意見が多かった（3.2に記載した自由記述「l」の回答を参照。以下、カッコ内のアルファベットは、3.2に記載した自由回答のアルファベット記号に対応する）。最近では、社内会議や報告を英語で実施するという企業が現れたり、就職の際に一定以上のTOEICのスコアを要求したりする会社も増えて来ている。また、企業のグローバル化に伴い、日本企業への就職の際も英語が堪能な外国人労働者や帰国子女と競争しなければならない現実もある。このような社会情勢を学生は敏感に感じ取っているようである。これは、2位の「人生の選択肢を増やす」（3.38）の結果にも表れている。積極的に英語を学ぶ訳ではないが、英語を学んでおいて損はないし、いつか役に立つかもしれない（k）といった安全策を選ぶ傾向にもつながっているようだ。

功利目的における第二の特徴は、自己受益目的と公共の利益目的とでは目的意識に差異がある可能性があるということである。例えば、「英語を使って国際国家としての日本に貢献する（2.50）」を見ると、国家繁栄のために自分が英語を学習するという意識は高くはないと言える。自由回答でも、自己受益目的のものが多く（例えばl）、英語を学ぶことで会社に役立つことが一番の目的（m）とした回答は稀な例である。

次に教養目的について考察する。功利目的の平均値が最も高かったとはいえ、教養目的も高い値を示している。特に、異文化理解（b～f）や多角的な視点を身につける（g～j）については、自由記述にも多くの回答があった。教養目的で最も特徴的であったのは、教養としての英語学習と知的刺激や、学習の充実感、楽しさなどを結びつけている記述が多かったことである。現実の社会で生きていくために功利目的をもって学習をするのであるが、学習の喜びは教養目的にあるという記述が多く見られた。例えば、dの記述などが代表的なものである。功利目的は道具的動機付け（instrumental motivation）につながり、教養目的や言語目的は統合的動機付け（integrative motivation）につながるとも言えよう（Gardner & Lambert, 1972）。言語習得においてはどちらも必要である（Dörnyei, 2001）ことを考えると、英語教育があまりにも功利的もしくは実用的な目的に偏重しないように注意する必要がある。教養目的や言語目的は、学習者の知的好奇心に訴える授業作りの基礎として念頭に置く必要があるであろう。

言語目的については、英語によるコミュニケーションを楽しむ(3.27)という目的意識が比較的高く、自由記述を見ても、留学生とコミュニケーションをしたいといった意見が散見された。外国人とコミュニケーションをすることは楽しいことであり、自分もそうしたいと考える学習者の割合は高いといえる。それに対して、英語という言語自体への理解を目的とする傾向はあまり高くない。しかし、自由記述の中には、英語の表現を覚えたり、語彙が増えたりしたことが嬉しいといった記述もあり(a)、英語学や英文学専攻の学生でなくても、英語自体に興味を持っている学生がいることは留意すべきである。

理想目的に関しては、全体的に高い平均値を示さなかった。国際的なアイデンティティ形成や人格形成という点については、自由記述で多少の回答があったものの(nとo)、全体の最下位であった「英語を使って真理の探究をする」については、半数以上の学習者がこのような目的をもっていないという結果になり、自由記述にも回答がなかった。「真理の探究」という言葉自体に馴染みがなく、学習者は具体的な内容を思い浮かべることができなかったことも考えられる。しかしそれでもなお、教員にとっては、究極の教育目的として念頭に置くべきものと言えるだろう。

4.2 英語学習のその他の目的

学習者の目的意識の多様性は、自由記述に多く表れていた。ここでは、質問票の項目では直接尋ねていない内容について触れた意見について考察する。その特徴は次の二つに大きく分けることができる。

まずは、自己表現をする目的である(p~s)。コミュニケーションをするには自己表現をすることが不可欠であり、それができない時にもどかしさを感じている(q)。また、日本語では表現できない気持ちを英語では表現できる(r)という意見もあった。また、実際にコミュニケーションをすることで、英語を学ぶ意味を理解した(p)という回答もあった。ここから伺えるのは、英語で自己表現をしたいという欲求を持つ学習者がいるということである。その中には、大学の英語の授業に対する高い期待が表れたものがあった。また、理想とする授業や大学での英語教育への期待が込められた記述も見られた。ここに例を二つ示す。

私の目的は、高校までの授業でできなかったことをするというものです。高校までは、やはり教科書授業というものが主流でしたが、留学した際に、同年代の外国人が、母国語でない英語を積極的に話している姿に驚く反面、悔しく感じました。同時に、日本の授業ではスピーキングレッスン、つまりディベートをしていないということでここまで差がついているのだと思いました。基礎にばかり重点を置き、実践経験を積ませないのはいかなるものかと思っています。だから、今まで基礎作りをしてきたので、大学の授業ではディベートをしたいです。

将来のことを考えると就職活動のためにTOEICなどの資格も重要だとは思っていますが、やはり英語を学ぶことで日本人だけではなく世界の多くの人々とコミュニケーションを

とれるようになることがわたしにとっては理想です。なので、readingのような授業も大切だとは思いますが、自分が考えたことを話したり、人の考えを聞いたりする授業のほうが好きです。

自由記述に見られる第二の特徴は、英語の授業の受講自体が目的という意見である (t-x)。大学入学後は英語を学ぶ機会が激減するので、週に数回の英語の授業であっても学ぶ環境があることが重要であるとする意見があった (v)。また、大学英語は入学試験を意識しなくて良いので、リラックスして楽しめる (u) という意見や英語を身近に感じながら学べる (w) という意見、または英語の授業が面白い (t) という意見などがあった。明らかに高校までと大学では、英語学習の目的が変化していることが分かる。大学で英語学習の機会と環境を提供し続けていくことの重要性が浮き彫りになった。

以上から分かるのは、具体的な目的をもって英語の授業に臨んでいる学習者がいるということである。これらの期待やニーズにどのように対応しているのか、英語教師の教育に対する目的意識も今後明らかにする必要がある。

4.3 学習者の目的意識の複雑性と可変性

本調査では、学習者が英語を学習する目的は多様であるだけでなく、複雑であり、変化していくものであることも分かった。学習者の意図は必ずしも単純に割り切って理解できるものではない。例えば、平均値が最も高く、96%という圧倒的な学習者が肯定的な回答をした「単位を取得して大学を卒業する (3.46)」であっても、自由記述の中には、単位取得が必須でなくても英語の授業を取りたいという意見 (s) があった。また、単位取得や卒業のために授業を受けているが、受講するにつれてその他の目的を持つようになったという意見もあった (a, b, d)。単位を取得するのは当然の目的ではあるが、そのためだけに英語の授業を受講している訳ではないことが分かる。また、英語の授業を受講し、様々な体験を積むことで別の目的を見つける学習者がいることも明らかとなった。

4.4 教員の実態調査研究の結果との比較

最後に、教員の実態調査 (2003) との比較をする。実態調査は、5項目の中から複数選択方式の調査を実施していることと、約10年前の調査結果であることから、単純に比較することはできないが、英語担当教師の教育目的として半数以上の教師が選択して1位になっている「外国語を使って、諸外国の文化・事情を理解する (51.7%)」は本調査では第10位である。また、実態調査で2位の「外国語を使って国際的に活躍できる能力を育成する (36.6%)」は本調査では8位、実態調査で3位の「外国語を通して教養を高める (35.5%)」は本調査では6位、実態調査では4位の「外国語を使って日常生活ができる (24.0%)」は本調査では16位、実態調査では5位の「外国語を使って日本のことを外国に伝えることができる (13.1%)」は本調査では18位となっている。上位3項目については、実態調査と本調査では、順番が入れ替わっている。この点、教員の目的意識と学習者の目的意識の間に乖離があるのか否か、今

後、大学の英語担当教員の教育目的調査をする際に精査する必要がある。

4.5 本研究の限界

本稿では、外国語としての大学の英語教育もしくは英語学習の目的を分類するにあたり、国内の議論のみを参照した。しかし、このような議論は国外でより活発であるため、それらの議論も踏まえた教育目的の分類をする必要がある。

また、英語学習の目的は、通常は明示的に表現されない部分である上に、多様で複雑であるため、調査参加者の意図を正確かつ詳細に汲み取るには、今回の量的調査と自由記述回答では限界があった。次回は、面接などを通して、質的分析を行う必要がある。

5. 結論

本調査により、学生は、実に多様な目的をもって大学の英語の授業を受講していることが分かった。これらの目的はあまり明示的に表現されることが少なく、複雑で捉えがたいものである。表面的には「単位のために勉強する」と言う学習者であっても、内面では異文化理解をしたいと思っていたり、知的刺激を求めていたりすることが考えられる。近年では、社会のグローバル化に伴い、実践的な英語運用能力を習得することが強く求められている。それと比例するように、大学英語教育も実用目的の比重が大きくなってきている。スイスの国際法学者であり、また大学の教育者でもあったカール・ヒルティは、「大学は学問の火がその時代時代の風向きに迷わされることなく常に静かに燃え続けるカマドであって、この火は単に向上する青年ばかりではなく、すべての人の心を温め、かつ照らすものでなければならない。」と言っている（草間，1973）。大学の英語教育は、常に社会からの要請に配慮をすべきである。しかしそちらに偏重しすぎて大学で教育することの本来の意義を失うべきではない。そこに大学で外国語教育を行う意義もあるものと考えられる。

今回の研究結果を踏まえ、次回は、日本の大学で英語を担当する教師の英語教育に対する目的意識の聴き取り調査をした上で、英語教育目的の類型化を行い、量的・質的調査を実施する。これによって、大学の英語教育で、教師は何を目的として授業を行っているのかを明らかにすると共に、学生の目的意識との共通点や相違点を明らかにしていきたい。

参考文献

- Brown, H. D. (2007). *Teaching by principles: an interactive approach to language pedagogy*. The 3rd edition. NY: Pearson ESL.
- Brown, J. D. (2001). *Using surveys in language programs*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Crookes, G. (2003). *A Practicum in TESOL: Professional development through teaching practice*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dörnyei, Z. (2001). *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dörnyei, Z. (2003). *Questionnaires in Second Language Research: Construction, Administration, and*

Processing. NY: Routledge.

- 大学英語教育学会実態調査委員会. (2003). 『わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究—大学の外国語・英語教員個人編』 大学英語教育学会実態調査委員会
- 大学英語教育学会実態調査委員会. (2007). 『わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究—学生編』 大学英語教育学会実態調査委員会
- Ellis, R. (2008). *The study of second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Ellis, R. (1997). *Second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Gardner, R. & Lambert, W. (1972). *Attitudes and motivation in second language learning*. Rowley, MA.: Newbury House.
- 片山嘉雄. (1973). 「英語教育の目的は何か」 『JACET通信』 第14号, 12-13
- 小池生夫. (1993). 「外国語教育（英語）の意義と目的」 大学英語教育学会内英語教育実態調査研究会（編） 『21世紀に向けての英語教育』 42(4), 18-24. 東京：大修館書店
- 草間平作. (1973). 「ヒルティの生涯と著作」 カール・ヒルティ（草間平作訳） 『眠られぬ夜のために』 375-385. 東京：岩波文庫
- 水島孝司. (2010). 「JACETにおける大学英語教育の目的論の系譜」 『英語教育学体系第1巻 大学英語教育学—その方向性と諸分野』 75-83. 東京：大修館書店
- 文部科学省. (2003). 「英語が使える日本人」 育成のための行動計画. Retrieved on October 10th, 2011 from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/choukyo/chukyo4/007/gi-jiroku/03032401/009.pdf
- 森住衛. (1991). 「新大学設置基準とこれからの大学英語教育」 『英語授業学の視点：若林俊輔教授還暦記念論文集』 33-45. 東京：三省堂
- 森住衛. (2010). 「大学英語教育学の考え方」 『英語教育学体系第1巻 大学英語教育学：その方向性と諸分野』 3-11. 東京：大修館書店
- 森住衛, 神保尚武, 岡田伸夫, 寺内一. (2010). 『英語教育学体系第1巻 大学英語教育学：その方向性と諸分野』 . 東京：大修館書店
- 村野井仁. (2006). 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』 . 東京：大修館書店
- Richards, J. C. and Renandya, N. A. (2002). *Teaching by principle*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Richards, J. C. and Rodgers, T. S. (2001). *Approaches and methods in language teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 佐藤義隆. (2002). 「日本の外国語学習及び教育の歴史を振り返る—日本の英語学習及び教育目的論再考—」 . 『岐阜女子大学紀要』 31, 43-52.
- 田地野彰. (2004). 「日本における大学英語教育の目的と目標について：ESP研究からの示唆」 『MM News』 第7号, 11-21. Retrieved on November 9th, 2011 from <http://www.momiji.h.kyoto-u.ac.jp/MMpage/MM/MM7/MM7tajino.pdf>
- 田崎清忠. (1995). 『現代英語教授法総覧』 東京：大修館書店

参考資料

大学で英語を学習する目的に関するアンケートです。匿名ですので、正直に回答してください。回答内容は、成績評価に関係ありません。所要時間は約5分です。

あなたが、大学の一般教養で英語を学習する目的は何ですか？当てはまる選択肢を選んでください。（4=非常にそう思う，3=そう思う，2=そう思わない，1=全くそう思わない）

1. 英語を使って諸外国の文化・事情を理解する
2. 英語を使って国際的に活躍できる能力を身につける
3. 英語学習を通して、教養を高める
4. 英語を使って日常生活ができるようになる
5. 英語を使って日本のことを外国に伝える
6. 人脈や交友関係を広げる
7. 就職に役立てる
8. 英語学習を通して多角的な視点を身につける
9. 英語学習を通して人格を形成する
10. 英語学習を通して、論理的な思考力を身につける
11. 英語学習を通して国際的なアイデンティティを形成する
12. 英語の資格を取得する（TOEIC、英検など）
13. 英語の美しさや面白さを理解する
14. 海外で仕事や生活ができるようになる
15. 英語の学習過程そのものが有意義である
16. 英語を使って国際国家としての日本に貢献する
17. 英語を使って真理の探求をする
18. 英語という言葉の特徴を理解する
19. 単位を取得して大学を卒業する
20. 英語でコミュニケーションをすることの楽しさを体験する
21. 日本の文化や考え方を再認識する
22. 英語を使って国内外の情報を収集する
23. 人生の選択肢を増やす
24. その他、あなたが大学で英語を学習する目的について自由に記述してください。
25. 学部学科
26. 学年
27. 性別
28. 英語は（3=好き，2=普通，1=嫌い）
29. 大学の英語の授業は（4=非常に必要，3=必要，2=不要，1=全く不要）

以上、Moodleのアンケート機能を使用して実施した

注

1 大学英語教育学会実態調査委員会（2007）の『わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究-学生編』もあるが、学生に対して外国語教育の目的意識を問うた質問項目はない。

2 全文は下記の通り

「第二条 教育の目標

教育はその目的を実現するため、学問の自由を尊重しつつ、次に掲げる目標を達成するように行われるものとする。

一 幅広い知識と教養を身につけ、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。

二 個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んじる態度を養うこと。

三 正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。

四 生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと。

五 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」

3 調査参加者の学年と学部学科 (N=316)

学部学科	1年生	2年生	3年生	4年生	その他
商学部商学科	36	1	10		
商学部経営学科	31	22	1		2
経済学部経済学科	19	1	7		
経済学部国際経済学科	9		1		
法学部法律学科	39		2	1	
法学部国際関係法学科			1		
人間科学部児童教育学科		34	3	1	
人間科学部社会福祉学科		64	3		
文学部外国語学科フランス語専攻		3	1		
国際文化部国際文化学科		22	1	1	
合計	134	147	30	3	2